---20:53:34, 水曜日 30, 1月 2013

携帯電話が、青白い光を、繰り返し点滅させる。

マナーモードになっていたため、音はしなかったが、たまたま彼女はそれに気づき、携帯を手にとった。メールかと思ったら、着信中、とあった。

驚いて、通話ボタンを押す。

「はい。もしもし？」

『――オレ。まだ、起きてた？』

耳に届いたのは、いつもより少し甘い感じのする、彼の声だった。

約１万キロメートルも遠い彼方にいるというのに、まるで距離を感じさせない。

目を閉じると、すぐそこに、彼の気配を感じるかのようだった。

「こんな時間に、どうしたの？」

むこうは、ちょうどお昼どき。たしかに時間帯として、悪くはないが、いままでこんなことはなかった。むしろ早起きな彼女は、朝一番に彼の声を聞くのが好きだった。彼もそれは承知していて、むこうに行ったときには、毎日でもモーニングコールをかけてくれる。もちろん、今朝も。

『ん・・・むしょうにおまえの声が聞きたくなって・・・夜まで待てなかった』

「・・・・・やだ・・・・ほんと、どうしたの？」

彼女は、頬を赤らめながらたずねた。耳に届いたのは、いっけん、彼らしいセリフであったけれど、実際は、とても彼らしくないセリフに思えたからだ。

なにより、声の響きが、いつもと違って聞こえた。いつもの、冷静さとやさしさが入り混じったような、深い響きのある声ではなくて、どこか切実で、彼にしては余裕がなかった。

「なにかあった？」

『ユキに、会えたよ』

「ホント？！　良かった～！　どう？　元気そうだった？」

『そうだね、思ったよりは、だいぶ。けど・・・』

「けど？」

『・・・・・・重症だよ、あれは』

彼女は青ざめた。

「え゛っ！？　事故？！　怪我！！？　まさか、病気？！！！？」

深い深いため息。そして、甘い吐息が、受話器から漏れる。

『―――恋の病（フジノヤマイ）』

！！！！！！！

彼女の驚いた表情が、やがてゆっくりとゆるんで、はにかむような表情になった。

「なあんだ。そうなんだ。心配して、損しちゃった」

もうあの子もそんな年になったのねえ、などとつぶやく彼女に、彼の呆れた声が届く。

『ユキの方が、年上だろ』

「でも、恋愛年齢は、わたしのほうがずっと上、でしょう？」

今度は、苦笑がひびいた。

『そうだね』

「そうだよ」

答えてから、彼女は少し、間を置いた。次の言葉を、いうべきかどうか、迷ったのだ。

しかし結局、電話ということが、彼女を少し大胆にさせた。ふだんならば、決して言えない台詞を口にする。

「だって、あなたと、出会ったせいだよ？」

けれども、口にしてから、あまりの恥ずかしさに、その後どうすればいいのかわからなくなってしまった。

「//////////////////////」

ほとんどパニック状態になった彼女は、それ以上、何も考えられず、じゃあこれで、とかなんとかいいながら、強引に会話を終わらせると、相手の返事もきかないまま、通話終了ボタンを押した。

（どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう…）

---12:59:07, 水曜日 30, 1月 2013